

国際宗教研究所ニュースレター

NO. 36 (02-3) 2002. 10. 25

・国内の動向 広池真一「新たな国立墓苑」
構想」

国内の動向

「新たな国立墓苑」構想-「無名戦士の墓」
と「怨親平等」をめぐる

広池 真一

1. 無名戦士の墓

ベネディクト・アンダーソンは、有名なナショナリズム論『想像の共同体』の冒頭で「無名戦士の墓 (tomb of the Unknown Soldier)」に言及している。

彼は無名戦士の墓と碑を近代文化としてのナショナリズムを最も見事に象徴するものだとし、以下のように述べる。「これらの記念碑は、故意にからっぽであるか、あるいはそこにだれがねむっているのか誰も知らない。そしてまさにその故に、これらの碑には、公共的、儀礼的敬意が払われる。……それがどれほど近代的なことかは、どこかのでしゃばりが無名戦士の名前を「発見」したとか、記念碑に本物の骨をいれようと言いはったとして、一般の人々がどんな反応をするか、ちょっと想像してみればわかるだろう。奇妙な、近代的冒涇！しかし、これらの墓には、だれと特定しうる死骸や不死の魂こそないとはいえ、やはり鬼気せまる国民的想像力が満ちている。」(アンダーソン、1997:32)

これはおそらく非常にユーモラスな文章なのだろうな、と思う。しかし、そのユーモアは、ここに描かれていることに関する知識を

あらかじめもっていなければ理解できない。かつ、それを当然のこととして認識していなければ、そのユーモアに対して自然に笑いを発することはできないのである。日本に生まれ育った私は、「ちょっと想像」しても、無名戦士の名前を発見することが如何に冒涇的なのか、理屈としては分かっていても感覚としてはよく分からなかった。おそらくアンダーソンのこの文章は(文化本質主義的でネイションの境界を自明視した言い方を許してもらえば)、多くの日本人には分かりにくい文章なのではないだろうか。

というのは、「無名戦士の墓」とはどんなものなのか、日本では知られていないと思われるからである。まず、『広辞苑』(1998年、第五版)には「無名戦士」とか「無名戦士の墓」という項目がない。

『日本国語大辞典』(2001年、第二版、小学館)には「無名戦士」という項目があり、「名の知られない戦士。有名でない戦士。」と説明されている。さらに用例として、「食後の散歩によくこのあたりをぶらついたが、ここにも無名戦士の墓があった。(池島信平『日本拝見一沖縄』1953)」「上の岬の神渡(かむわたり)に、流れついた無名戦士の墓がある。

(堀田善衛『鬼無鬼島』1956)」の二つの文が挙げられている。ただし、これらは単に無縁仏の墓であり、アンダーソンが言っているものとは違うものであることは明白である。

アンダーソンが言っている「無名戦士の墓」とは、彼の文章から考えれば、被葬者である兵士の匿名性ゆえに逆にネイション全体を象徴するとされる墓のことであるらしい。そうであるならば、例えばアメリカのアーリントン国立墓地にある「無名戦士の墓」はまさにこれに相当するのであろう。

アーリントン国立墓地の無名戦士の墓は、毎日 24 時間体制で陸軍の衛兵によって警備されていることから分かるように、国家にとって非常に重要なものと考えられている。1932 年に完成したこの墓には、第一次大戦、第二次大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争で戦死した身元の分からない兵士の遺体の中から一体ずつが選ばれて埋葬されており、その一体ずつに全戦没者を代表させている。墓の碑文には「神のみぞ知る亡きアメリカ将兵 1 名、名誉ある栄光のうちにここに眠る」と刻まれている¹。

欧米起源であるナショナリズムはいまや全世界に伝播している。アジア・アフリカの諸国家にとって近代化の重要な要素であるナショナリズムは、領域内の文化や歴史（とされるもの）でもって国民統合を進めることであるとともに、色んな物事を「国際スタンダード」に合致させることでもある。例えば、「アメリカやイギリスにはこれこれのものがある。だから日本にも同じようなものを「日本の伝統」に合った形で造らなければいけない」と考えるのはナショナリスティックな思考であるといえよう。

「新たな国立墓苑」をめぐる日本における動向は、ナショナリズムのこのような側面を考える際に興味深い事例を提供してくれる。戦没者を慰霊・追悼するための施設として、無宗教の国立墓苑あるいは国立追悼施設を造るという構想は、戦後から今まで何度も存在したが、その際常に問題になるのは、「国際スタンダード」だからである。

2. 追悼施設と「国際スタンダード」

例えば 1950 年代、戦没者墓苑を造る際の準備作業においては、国会図書館が米、英、独、仏、伊、華の戦没者墓地の事例を研究している。その結果、各国の戦没軍人墓地の状況は多様だが、「無名戦士の墓」はいずれも国民崇敬の霊域として、最大の敬意をこめ、国としての深い心遣いはらわれているのみならず、国際儀礼上の重要な一要素となっていると結論付けられた（厚生省援護局庶務課記録係編、1963:261）。1963 年の厚生省援護局の文章では、結果として出来上がった国立墓苑をこの中に位置づけ、「海外の旧激戦地における現地追悼及び遺骨収集にあたり戦没者の遺骨中からその一部を当該地域戦没者の象徴遺骨として内地に持ち帰り、その納骨施設を建立することから出発しているわが国の戦没者墓苑は、……むしろ独特なものといえることができる」としている (ibid:262)。

ただし、当初仮称のまま「無名戦没者の墓」と呼ばれていたこの墓苑は、「無名」という言葉が日本語として成熟していないという指摘によって、1959 年に「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」という名が付けられて竣工に至っている。また、当時外務省が外国語の定訳を要求していたのは、この墓苑を外国に紹介するということが重視された証左である。しかし外国語の定訳は、発表されなかった (ibid:262-263)²。

この国立墓苑が結局「無名戦没者の墓」と呼ばれず、外国語の定訳も定められなかったのは、墓苑の性格付けの問題と関わっている。当時、靖国神社の崇敬者の中に、この施設が

¹ ただし、ベトナム戦争の無名戦士は身元が分かったもので、今はベトナム戦争の無名戦士の墓には誰も葬られていない。

² 墓苑竣工式翌日(1959.3.13)のJapan Times 紙は、千鳥ヶ淵戦没者墓苑を、“Chidorigafuchi Unknown Soldiers' Tomb”とした。現在、英語で同墓苑が呼ばれる際には、“Chidorigafuchi National Park”とか“Chidorigafuchi Memorial Park”とか、様々な呼ばれ方をされている。

全戦没者を慰霊する国家の中心的施設となり、靖国神社がないがしろにされるのではないかという危惧が起こった。そのため、その後厚生大臣主催の会議で、この施設は遺骨を収納する納骨施設であり、収納するのは、遺族に引き渡すことができない遺骨である、全戦没者の象徴として一部の遺骨をまつとする諸外国の「無名戦士の墓」とは異なる、と位置づけられたのである³。つまり、千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、設立の過程では「国際スタンダード」が念入りに検討されたにも関わらず、最終的にわざとこのスタンダードからはずされたのである。

ただし、この千鳥ヶ淵戦没者墓苑の位置づけに関して、このような「公式見解」とは異なるものもあり、一様ではない。例えば、宗教学者・村上重良は「無宗教の国家施設である同墓苑は、諸外国の無名戦士の墓と同じく日中戦争と太平洋戦争の全戦没者を象徴する記念施設」であるとしているし（村上、1974:211）、千鳥ヶ淵戦没者墓苑のパンフレットでは、同墓苑を「無名戦士の墓」とし、「軍人や軍属だけでなく、一般邦人をも含むすべての戦争犠牲者の象徴的な遺骨を奉安した国立の墓苑」と見なしている。新日本宗教団体連合会などもこれに倣っている⁴。これらは、やはり千鳥ヶ淵が「無名戦士の墓」であり、「国際スタンダード」に合致したものだと言っているのである。

さらに、2001年6月に行なわれた党首討論で、社会民主党党首の土井たか子がこれに近

い立場を表明している⁵。土井党首は、国賓として外国を訪問した場合、その国の「無名戦士の墓」に花を捧げるのは「国際的な慣例」になっていると指摘し、日本でそのような墓に相当するのは千鳥ヶ淵戦没者墓苑だと述べている。小泉純一郎首相に同墓苑の整備を要求し、最後に「無名戦士と信教の自由というのをひとつ尊重してください」と締め括っている⁶。

しかし、先述したように、日本には「無名戦士」という言葉自体がよく知られていないのではないかと。靖国神社を重視し、新しい慰霊施設構想を批判した、ある文章の中に「靖国神社が政府の認定した戦没者名簿に基づいて御霊を祀っているのに対し、千鳥ヶ淵墓苑はいわば「無名戦士の墓」である」という表現が見られる（PHP研究所編、2002:264）。千鳥ヶ淵は靖国神社と違って全戦没者を代表する訳ではないと主張される場合、千鳥ヶ淵は「外国の無名戦士の墓とは異なる」と表現されることが多い。しかし、ここでは「無名戦士の墓」だからこそ、むしろ全戦没者を代表できないと考えられているわけである。靖国神社の祭神の場合、個々の名前が分かっており、「霊璽簿」に記載されているわけだから、「無名戦士の墓」の「無名性」と全く相容れない性質をもっているのは確かである。

ただし、靖国神社を重視する人々が、「国際スタンダード」を意識していないかという点、

5

<http://www.jca.apc.org/sdp/text/seisaku/question/q010620.html>

⁶ 同じ党首討論の場で、民主党党首の鳩山由紀夫も、田中眞紀子外務大臣のアーリントン訪問をほめ、日本にも同じものを造ろう、千鳥ヶ淵戦没者墓苑の拡充でもよい、と発言している。

http://www.dpj.or.jp/seisaku/sogo/BOX_SG0037.html

³ http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tuitou/dai2/siryo2_1.html

⁴ 戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典のパンフレットなど。

ナゴシフタラノスケ
決してそうではない。名越二荒之助は靖国神社のことを、「アメリカで言えば、アーリントン国立墓地に当る」と書いている(名越、2001)。また、英霊に答える会は、自民党関係者に配布した声明の中で、靖国神社には諸外国の要人が参拝しているので、新たな施設を造る必要はないとしている(「国立戦没者墓地構想に対する英霊にこたえる会声明」平成13年7月6日)。靖国神社を重視する人々にとっては、「国際スタンダード」は大切だが、一方で匿名の死者ではなく、あくまで名前の分かっている人の集積が国家を代表しているという発想が強いと言える。

また、千鳥ヶ淵でも靖国神社でもない、新たな国立墓地を造ろうと提案する人々も、「外国の元首が献花できるような」とか「アーリントンのような」という言葉を使うことが多い⁷。2001年12月に開設された福田康夫官房長官の私的懇談会「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会⁸」(以下「平和祈念懇」と略す)でも、やはり外国の国立墓地の状況が参照されている。

この懇談会の第二回会合では、政府側からの報告として、まず靖国神社や千鳥ヶ淵戦没者墓苑、一般戦没者に対する追悼などについ

て述べられた後、「諸外国における主な戦没者追悼施設の現状について」として、英、独、仏、伊、米の状況が述べられた。千鳥ヶ淵墓苑が造られたときにやはり外国の施設が調査されたのと似ているといえよう。

第三回会合では、新しい施設における追悼のやり方として、外国における無名戦士の墓の例に倣って千鳥ヶ淵にある遺骨の中から一体を選んで全戦没者を代表させるという案が出ている⁹。この案は、新しい施設の「追悼の対象」に関する話の中で出てきたものであり、発言者は、「追悼の対象」を国全体に影響の及ぶような事態で亡くなった人に限るとして、人の名前を特定せず、例示として何らかの形で明示を行なうという考えを示している。その具体的方法として、木の柱を一本立てるというやり方と、無名の兵士を一人納めるといふ、このやり方を挙げているのである。このように、海外の無名戦士の墓の造り方を忠実に踏襲しようとする議論は、日本では珍しいのではないだろうか。

以上のことから、次のことが分かる。「新たな国立墓苑」が議論されるときは、常に「国際スタンダード」が問題となっている。ただし、アーリントンの「無名戦士の墓」を始めとする欧米国立追悼施設(千鳥ヶ淵戦没者墓苑準備の際には中華民国の追悼施設も参照されたが、基本的にはアメリカ合衆国と西ヨーロッパのもののみが問題になる)が参照されるわりには、身元不明の遺体の中から一体選ぶという形式そのものはあまり問題になっていない。

⁷ 例えば、公明党の冬柴鉄三幹事長の発言。
<http://fuyusiba.net/interview/20010528.html>

⁸ 2001年8月の首相談話を受けて設置された。懇談会の趣旨は、「21世紀を迎えた我が国は、来年、「日本国との平和条約」発効50周年を迎えることもあり、これを機会に、何人もわだかまりなく戦没者等に追悼の誠を捧げ平和を祈念することのできる記念碑等国の施設の在り方について幅広く議論するため、この際、内閣官房長官において高い識見を有する人々の参集を求め、この問題に関して懇談会を開催することとする。」というものであり、検討項目は、国の施設の必要性、種類、名称、設置場所等となっている。
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tuitou/index.html>

⁹ この懇談会には、新施設建設に反対する者も含め、様々な立場の人が参加している。なお、首相官邸のサイト記載の議事録では、発言者の名前は分からない。

3. 怨親平等

国家による追悼行為がしばしば批判の対象になるのは、我々の死者と彼らの死者の間に線引きをし、我々と彼らの溝を深めてしまうとされるからである。だとするならば、戦死者の間に境界を引かず、すべての戦死者を平等に追悼するという普遍主義的思想は、近代国民国家成立後に、国家が自国のための戦死者を「英霊」として顕彰するという思想とは対照的であると思われる。近年注目されている「怨親平等」の思想はこれに相当するだろうか。

『日本佛教語辞典』（平凡社、1988）によれば、「怨親」とは「怨敵と近親。自分を害しようとする者と自分を愛してくれる者」を表す仏教語である。大慈悲は仏法の基本であるという立場から、『仏所行讚』などの多くの仏典に見られる。

さらに、『仏教辞典』（岩波書店、1989）によれば、「怨親平等」という言葉は「戦場などで死んだ敵味方の死者の霊を供養し、恩讐を越えて平等に極楽往生させること」という意味にもなる。清浄光寺の境内には15世紀の合戦で戦死した敵味方の人畜の往生浄土を祈願した「怨親平等碑」があるという。また、文永・弘安の役の後、両軍の死者の菩提を弔うために北条時宗が円覚寺を建立したのもこの思想に基づいているとされる（西村、2002 など）。

靖国神社に否定的な宗教者は、しばしばこの種の普遍主義を靖国の思想に対する批判の拠り所としてきた。例えば、浄土真宗本願寺派の二葉憲香は、「実際靖国神社問題というのは、国の為に死んだ人を国が尊ぶのが何が悪いかというようなところで議論されているわけです。それは国家主義的な立場から言いま

すと極めて当然なことなんです。しかしながらこれを我々の宗教の立場から考えていきますと、「一切衆生」というのですから日本人ばかりではだめなんです」と述べている（二葉、1991:121）。

また、既に「怨親平等」あるいはこれに近い思想に基づいた戦没者慰霊を実践しているところもある。例えば、新日本宗教団体連合会は毎年8月14日に千鳥ヶ淵戦没者墓苑で戦没者慰霊（戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典）を行っており、浄土真宗本願寺派は毎年9月18日に「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」を行なっている。これらの式典では世界史上のすべての戦没者が慰霊の対象になっている。

先述の平和祈念懇では、追悼の対象として外国人を含めるか否かが議論されている。その際、外国人の追悼に賛成する委員によって、過去の「怨親平等」の例は、日本の、あるいは東洋の伝統として肯定的に扱われている。

「敵、味方ともに弔うのが我国の美風」（第三回）とか、「やはり日本人というか東洋人の宗教観の中に、例として元寇の後の円覚寺があるが、敵、味方を問わずという考え方が東洋にあったのだろう。靖国神社はやはり幕末から1945年まで続いたある種の西洋の影響を受けたナショナリズム的な考え方であって、今それを捨てるのではなくて元へ戻るという考え方はあつてしかるべきだ。」（第五回）という発言には日本の伝統を称揚するナショナリズムが感じられる。それに対して、「それは必ずしも東洋だけではなくて、戦闘能力を失った敵兵は赤十字の思想で扱うという考え方が世界的にある。」（第五回）という発言もなされている¹⁰。この懇談会では、大前提とし

¹⁰ また、諸外国の施設にそのように外国の死者まで祀ったものがあるのかと質問している者もいる

て国家が追悼を行なうことが必要だという認識があることもあり、やはり何らか民族・国籍による区別を設けるという考えが強いように思われる。

一方、靖国神社にも敵味方の区別なく戦死者を祀るという考え方がない訳ではない。靖国神社敷地内に「鎮霊社」という小さな祠が1965年に造られたが、そこには靖国神社本殿に祀られていない日本人戦死者の霊と世界各国すべての戦死者の霊が祀られているとされる。

しかし、靖国崇敬者たちにとって、鎮霊社に祀るということと、本殿に祀るということとは意味が大きく異なっている。中曽根内閣時代に靖国神社のA級戦犯分祀が問題にされたとき、中曽根の政治参謀である瀬島龍三がA級戦犯を鎮霊社に移す案について戦犯の遺族に尋ねたが、全員に反対されたという¹¹。

また、靖国神社を重視する人々の中には、平和祈念懇で出された外国人をも追悼するという案に強い拒否感を示す人もいる。例えば百地章は、懇談会で円覚寺の例が出されたのを批判して、問題は近代国家になってからの戦没者の慰霊をどうするかだと述べ、敵方を祀るのは国家の否定につながると言う。さらに、アメリカやイギリス、フランスなど各国の無名戦士の墓にも外国人を追悼の対象とした例はないとしている。工藤雪枝もこれに賛成し、「諸外国では、追悼のために相応しい場所に追悼施設があり、国のために命を捧げた魂を大切に慰霊し荣誉と名誉を与えているといえるでしょう」と応じている¹²。ここでは、

近代国民国家の論理と「国際スタンダード」が強い影響力をもっていることがうかがえる。

これらのことから、国立慰霊施設を議論する人々の間に、「怨親平等」思想はそれなりに広まっているが、それは様々な形で限界づけられる場合があることが分かる。

4. 終わりに

国家を代表する施設として「新たな国立墓苑」が構想されるときも、又それに対する反対が起こる場合も、「国際スタンダード」が強く意識されることが明らかになった。しかし、その際でも「無名戦士の墓」のように祀られている匿名性をもつゆえに、逆に全ネーションを代表するという考え方はあまり問題になっていない。またその際、「国際スタンダード」の扱い方も含めて、論者たちの意見はとて多様であり、収斂させるのは非常に困難である。

しかし、千鳥ヶ淵で国家・民族の枠を越えた慰霊が行なわれるとき、又平和祈念懇で個々の人を特定しない、外国人の死者の慰霊も含めた慰霊が構想されるとき、靖国神社の鎮霊社に参拝者が訪れるとき、「無名戦士の墓」を足がかりにして「無名戦士の墓」の枠を突き破るような、他者との関わりの萌芽が見られるのかもしれない。

参考文献

- アンダーソン、ベネディクト、1997.『想像の共同体』白石さや・白石隆訳、NTT出版。
二葉憲香、1991.「靖国と浄土」浄土真宗本願寺派反靖国連帯会議編『真宗と靖国問題』永田文昌堂（京都）。
厚生省援護局庶務課記録係編、1963.『続々・引揚援護の記録』引揚援護庁。

(第五回)。これは、やはり追悼施設は「国際スタンダード」に合わせなければならないとする考え方の強さを示す。

¹¹ 『Voice』September, 2002

¹² 『諸君』2002年8月

- 田中伸尚、2002. 『靖国の戦後史』 岩波新書.
- 村上重良、1974. 『慰霊と招魂 —靖国の思想—』 岩波新書.
- 名越二荒之助、2001. 「靖國神社・千鳥ヶ淵・アーリントン墓地を比較する」『祖国と青年』 2001年8月号.
- 西村明、2002. 「慰霊と暴力—戦争死者への態度理解のために」『現代宗教』 2002.
- PHP研究所編、2002. 『検証・靖国問題とは何か』 PHP研究所.